

氏名(本籍)	おかのひろゆきの 岡野裕行(茨城県)	
学位の種類	博士(学術)	
学位記番号	博甲第4147号	
学位授与年月日	平成18年6月30日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
審査研究科	図書館情報メディア研究科	
学位論文題目	日本近代文学研究における文学館の役割 -「全国文学館協議会」加盟文学館の発行物を中心に-	

主査	筑波大学教授	黒古一夫
副査	筑波大学教授	寺田光孝
副査	筑波大学教授	綿抜豊昭
副査	筑波大学教授	緑川信之
副査	都留文科大学名誉教授	関口安義

## 論文の内容の要旨

日本の文学研究は、戦後になると戦前の「古典文学」を中心とした「国文学研究」を引き継ぐ形で、明治以降の「近代文学」・「現代文学」をも研究の対象とする幅広いものになってきたが、特に最近では近代文学作家や文学潮流を「書誌学」的側面から研究することの重要性が見直されるようになってきた。単なる「伝記」ではなく、「著作目録」(初出目録)や「年譜」といった書誌事項を踏まえた作家の「評伝」という形の研究が広く行われるようになってきたのは、その一つの証左である。本論文は、そのような「書誌学」的側面を重視した近代文学・現代文学研究において、作家の著作物を始め遺品や関係書籍・雑誌などを集めて広く一般に公開している文学館が、どのような役割を果たしているのか、またそれはいかなる意味を持っているのかをその「発行物」に着目して考察したものである。なお、文学館およびその文学館が発行する「発行物」と近代・現代文学研究との関連は、近代文学研究者の側からも、また図書館情報学研究者の側からも研究対象(主題)が新しいということもあって、これまでの研究ではほとんど取り上げられることがなかった。

論文は、「第1章 はじめに」において、如上のように日本の近代文学・現代文学研究において文学館の「発行物」はどのような役割を果たしているのか、という問題意識の下に、まず文学館は全国でどれほど存在するのか、またそのような文学館の中にあつて「全国文学館協議会」とはどのような組織であるのか、そしてこの組織に加盟する文学館の「発行物」を研究対象とすることの意味はどこにあるのか、またそれらに関してこれまでどのような議論がなされてきたか、について述べている。現在、文学館と呼ばれるもの(図書館や公民館、文化センターなどに併設された「文庫」なども含む)は、全国で555館を数え上げることができ、バブル経済時代の1980年代から90年代にかけて「地方の時代」論を背景に各地で設立されるようになった。現在その建設熱はやや下火になったが、「豊かな時代」「文化の時代」を反映してか、その活動はますます盛んになり、その存在の重要性は近代文学・現代文学研究との関係からだけではなく、市民の文化活動の拠点としても見直されるようになってきた。

「第2章 文学館の発行物」では、日本近代文学館理事長中村稔(詩人)が分類した文学館の「図書館的機能」「博物館的機能」に加えて、論文では文学館が多くの「発行物」を刊行しているので、文学館には「出版者

的機能」を具えているとした。つまり、中村の分類に加えて文学館には「出版者の機能」があるとしたのは、図書館や博物館に比べて文学館の「発行物」が近代・現代文学研究において大きな役割を果たしているからであった。そして、論文はその「発行物」を「種類と現状」「目的」「機能」の側面から考察する。具体的には、文学館の「発行物」が「展示に関する記録」（展覧会の「図録」など）、「所蔵資料に関する記録」（「所蔵資料目録」など）、「所蔵資料／対象作家の研究に関する記録」（「作家研究」や「作家の伝記」など）、「対象作家の作品」（対象作家の「作品集」や「書簡集」など）、「対象作家以外の人の作品」（文学館が発行母体になった「同人雑誌」など）、「文学館活動に関する記録」（代表的なものとしての「館報」など）の6つ（17種類）に大別できるとし、それらの文学館「発行物」の特徴及びどの文学館がどのような「発行物」の刊行に力を入れているか、「全国文学館協議会」加盟文学館の全てを調査した「資料」（「付録」として巻末に附されている）を基に考察を行っている。

「第3章 文学館の『出版者の機能』」では、第2章で6種に分類した「発行物」の全てが各文学館で発行されているわけではなく、「付録資料」を基に、それぞれの館で特徴ある「発行物」が刊行されていることを指摘している。それは、文学館を例えば筆者が分類した日本近代文学館や神奈川近代文学館のような「総合文学館」、それより小規模であるが各都道府県やある特定の地域に設置されている、例えば市立小樽文学館などの「地域文学館」、さらには文学者個人の名前を冠した三浦綾子記念文学館（北海道旭川市）や徳田秋声記念館（石川県金沢市）などの「個人文学館」毎に綿密な調査に基づいて考察されている。

「第4章 日本近代文学研究と文学館」では、三浦綾子記念文学館の協力を得て筆者が作成した「三浦綾子書誌」（2003年4月 勉誠出版刊）の経験と、日本近代文学館が1970年代から積極的に行ってきた名著（稀覯本）や貴重雑誌の「復刻」活動に着目して、日本近代・現代文学研究にとって文学館及び文学館の「発行物」はどのような役割を果たしてきたのか（いかなる役割を担っているのか）、について具体的に考察している。特に、「三浦綾子書誌」作成の経験と日本近代文学館の「復刻」活動に関する調査・考察を基に、筆者はそれまで一部の研究者を除いて日本の近代・現代文学研究において余り重要視されてこなかった「書誌学的研究」（近代・現代文学研究における「基礎的研究」）の重要性を強調している。

「第5章 おわりに」では、文学館の「出版者の機能」が現在どのようになっているのか、及び「残された課題と今後の展望」について言及している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

### 1. 研究目的について

研究題目が示すように、本研究は「日本近代文学研究」と文学館とがどのような関係にあるのかを、その「発行物」を中心に調査・考察を行ったものであるが、その点に関しては先行研究がほとんど無い状態の下で、明確な研究目的を持って最後まで研究が進められたという評価が多かった。特に、この研究目的に基づいて行われた「全国文学館協議会」加盟文学館の「発行物」に関する「調査」及びその「分類」、「目録」に関しては、その種の調査・分類・目録作成がこれまでの近代文学研究・書誌学的研究においてほとんど行われてこなかったということを考えると、その網羅性、包括性、徹底性は高く評価できるという意見が多かった。また筆者の調査能力は、すでに博士課程前期（修士）の論文に附された「三浦綾子書誌」（2003年4月 勉誠出版刊）によって証明されているが、本研究の「資料」として附された書誌学的成果は基礎的研究として、高い評価を受けた。

ただ、その高い調査能力に頼る余り、日本近代・現代文学研究において文学館「発行物」が果たしている役割について、「総発行点数」や「発行物の割合」などの「数字」にこだわる傾向が目につき、具体的な発行物の「内容」にまで踏み込んでそれぞれどのような特徴があるのか、それは日本近代・現代文学研究と具

体的にはどのように関係しているのか、についての考察が弱いのではないかという指摘もあった。また、文学館には「図書館的機能」「博物館的機能」「出版者の機能」の3つがあるとした分類方法には、さらなる実態に基づいた研究が必要なのではないかという指摘もあった。

## 2. 研究方法について

まず本研究は、大学院前期課程（修士）で行った「三浦綾子書誌」作成の経験から、文学館の日本近代・現代文学研究の基礎的研究（個人書誌作成、等）に果たしてきた役割に着目して、具体的には文学館が刊行してきた「発行物」を中心に調査・考察を進めたものであり、各地に存在する文学館がどのような「発行物」を持っているか全く知られていない現状を考えると、総体的には意味のある研究であったと評価された。次に全国で555館ある文学館を「総合文学館」「地域文学館」「個人文学館」の3種に大別し、それぞれの文学館における「発行物」を「図録」「目録」「館報」など6つ（17種類）に分類し、それらが日本近代・現代文学研究における「基礎的研究」（例えば書誌学的研究）に具体的にどのような役割を果たしているか、自らの「三浦綾子書誌」作成の経験、及び日本近代文学館の名著（稀覯本）や貴重雑誌の「復刻」活動を例に考察を加えていることに対して、方法的には正当だったのではないかと評価された。

ただ、では「三浦綾子研究」における「三浦綾子書誌」は別として、どのような文学館のいかなる「発行物」が日本近代・現代文学研究（作家研究や作品研究）に具体的な形で寄与してきたのか、という考察には不十分な面が見られ、具体的な事例研究が行われればさらに研究に深みが増したのではないかと、指摘もあった。

## 3. 内容について

(1) 論文の構成について－本論文は、基本的には調査から得られたデータ（資料）を基に構成されているが、具体的に「発行物」の内容を検討することによって研究主題の「日本近代文学研究における文学館の役割」に基づいて、それぞれがどのように日本近代・現代文学の研究と関係してきたか、を考察する形になっている。ただ、「図録」や「館報」などの「発行物」の詳細な検討という点では、不十分な部分もあり、それはこの呉の具体的事例一つ一つの検討を待つ必要があるとの意見もあった。

(2) 記述の仕方について－調査した「資料」を基に論述する方法は、「実証的研究」の本道をいくものであり、「資料」の使い方、データを基に分析された内容に関する記述、研究主題に基づく展開の仕方、等、先行研究がほとんど無い状態での研究であることを考慮すると、高く評価されるのではないかと、という意見が多かった。ただ、先行研究と言うべき書誌学及び日本近代・現代文学研究の書誌学的研究の現状への目配りが充分でない面もあり、そのことが記述方法にも反映し、研究への建設的意見が少なくなっているのではないかと、という指摘もあった。

(3) 資料整理の仕方について－これまでこの種の研究がなされてこなかった事実を踏まえると、著者が単独でこれだけ膨大な「資料」（「全国文学館協議会」加盟の文学館だけでも、総発行点数は6279点に上る）を分類・整理し、それをデータベース化できるようにまとめ上げた能力は高く評価された。今後、この種の研究は筆者が作成した「資料」（データベース）に基づいて行われるのではないかと、との指摘もあった。

(4) 研究の新規性・独創性について－本研究がこれまでほとんど研究対象とされてこなかった主題に取り組んでいることは、新規性・独創性という観点からは高く評価されるという意見が多かった。その意味では、日本近代・現代文学研究において今後確実に重要な位置を占めて来であろう文学館の存在（その資料など）とその「発行物」について研究した本論文は、今後の研究の「先駆」をなすものであり、「水先案内」の役割を果たす内容になっているのではないかと評価された。その点については今後のさらなる研鑽が期待されるとの意見もあった。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。